

(6) 補習授業と飛び級試験

常磐松小学校では、有名中学へ卒業生を送りこむための学習体制を採っていた。そのために4学年の末に、児童を中学校進学組と、進学しない組とに分けて、進学組には受験のための補習授業を授けた。

第5学年になると、教師たちは中学校の等級づけを行なった。「七年制高等学校の中学部〔青山師範や武蔵など——引用者註〕と、東京府立第一中学校は、第一級であり、陸軍幼年学校その他は第二級であり、第三級以下は話にもならない」。

学校の授ける補習授業は、今日の小学生が通う受験塾のようなものである。塾に通う児童たちには、お互いの競争意識と連帯意識とを合わせ持っている。しかし、多くの子供たちはそういう教育を受けることに対する疑問はもっていないだろう。ひたすら「調教師」が描く計画に従って、日々を過ごしてゆく。

小学生の加藤もまた受験勉強に努力を傾けることに対する疑問はなかった。「中学校の入学試験は私の本業」であると心得、「本業に精を出し」そういう「自分自身に満足し」ていた。そうなれば祭りの賑わいにも、神社の境内の子どもたちの遊びにも、心惹かれることはなくなる。かくして受験勉強はほとんど運動競技の練習のようなものになり、練習がそれなりの効果をあげれば、達成感という御褒美を得ることができるのである。

親の勧めに従って、東京府立第一中学校の「飛び級試験」を受け、首尾よく合格した。多数の級友たちが小学6年生になるとき、加藤は学校を離れ、桜横町や松本先生と、後ろ髪を引かれる思いで別れなければならなかった。加藤自身は「満足を感じなかったわけではない

が、その満足には実質的な内容もなかった」と述懐するのだった。